

第二次世界大戦記

黒澤 袈裟人

中野一丁目

昭和十八年一月十五日、石川県金沢市東部五一部隊金沢騎兵重機関銃隊に入隊す。

北陸地方金沢市、富山市を中心に、毎日降雪の季節である。

朝起きてみると、七〇センチから八〇センチくらいの雪が積もっている。起床と同時に除雪作業。点呼後は馬の手入れ、舎内の清掃。朝食後は直ちに雪の練兵場にて乗馬および重機関銃の操作の猛訓練を毎日繰り返す。

九月十日戦地へ出発の命が下され、直ちに金沢出発、九州門司港到着。十三日、日露戦争当時使用した貨物船に乗船、門司港出港。兵隊も馬も同船。玄海灘を経由、一路南へ南へと東支那海に出、台湾高雄港に寄港、二日間停泊、サイゴンに向かう。サイゴンに上陸、飛行場前の兵舎に入り二週間ほどでプノンペンに向かう。メコン河を輸送船にてプノンペン郊外の森の中に一か月間くらい宿営。十一月三〇日、タイ国バンコックへ貨物列車にて出発。十二月五日、バンコック駅より泰緬山岳鉄道にてビルマ国へ向かう。列車とは申せ、無蓋貨車（屋根のない貨

物専用車）にて時速三〇キロメートルくらい。険しい山あい、断崖絶壁なる溪谷の間を進行。鉄橋、トンネル等も数箇所あり、よくもこんなところに建設したものだただただ驚くのみ。日本鉄道隊兵の労苦が忍ばれた。映画化された戦場にかける橋クワイ河の上も通過。タイ国よりビルマに行く鉄橋では一番苦勞をした橋だとのこと。カンチャナプリ市より西北百二十キロ、トンパプロ郡ロックの山岳地である。

輸送貨車にて、日中四〇度の暑き炎天下を一路ラングーン市へと進行。途中現地人の集落。小さな草ぶき屋根、竹の柱にアンペラを敷いた家に住み、子供はみな裸で、大人も子供も女子も裸足のまま。見るものは珍しいものばかり。貨車はナコンパトム駅、カンチャナプリ駅通過、モールメンへ到着。ここからはサルウィン河の渡河点となり、大きな三〇人くらい乗れる筏で対岸マルタバンへ着き、また貨車に乗り、途中ペグー駅で下車。ここは世界でも有名な釈迦の寝像があり、参拝した。

昭和十八年十二月十三日、ビルマ国第一の都市ラングーン市

に着く。道路の両側の木の下には物売りが賑わっている。果物は豊かで、バナナ、パイナップル、マンゴー、ヤシの実、黒砂糖で加工した饅頭菓子。また、現地人が日本語でオコワマンマというのは赤飯のこと。ヤシの葉に包んで売っており、気にかかるのは、何となく不潔で食物に蠅が多くついていることで、買って食べる気にはなれなかった。また、部隊より、現地人から物を買うのは禁じられていた。

十二月二五日、ラングーン市を出発す。ただただ、暑い暑い連発。途中、停車駅とは名ばかり、ちょっとした小さな集落の郊外のホームもない駅に停車。機関車に水を入れ、石炭のかわりにゴムの木を積み燃料とする。そのため、機関車の煙突より吐き出す火の粉が無蓋車の兵隊の頭の上、体にバラバラ落ちて来て、払い落とすのに懸命であった。ペグー、トングー、ピンマナ、ヤメセン、アマナプラ、サガインを経て、マンダレー（ビルマ第二の都市）に着き、当部隊はマンダレーに駐留することになった。兵舎はイギリス兵の使用していた建物であり、木造で床も高く、風通しも居心地もよく、立派な兵舎であった。兵舎の北側、マンダレーヒル（丘とか山とかいう意味）のふもとに、林に囲まれた広々とした芝生の平地。戦前イギリス兵の駐屯したところで、競馬場、ゴルフ場などの跡だった。休日にマンダレーヒルに登って見渡すと、なんと広いところだろう、四方を見ても山らしい景色はなく、ところどころに森が見える

だけ。山の上に小さな堂があり、その中に仏像が日本風の下駄をはき、番傘を持った姿で立っていたのを拝観し、手を合わせるのであった。

マンダレーには昔の王城があり、二キロ四方を厚さ二メートル、高さ十メートル位の煉瓦で囲った堀、外側には、また大きな堀で四方を囲い、深さ三メートル、幅八メートル位で王宮の跡を残しており、この堀の水は、マンダレー住民の水道用として使用している大事な水源でもあった。堀の水は二千年前から自然に地中より湧き出ている。ただ、困るのは、現地の人はこの堀端で洗濯や行水を一日に二、三回はするので、汚れ水がまた堀の中に流れ込む。実に衛生観念などとは程遠いように思われた。我が隊も、この堀の水を兵舎まで直径六センチメートル位の鉛管で引いて来て使用していた。この鉛管は、もとイギリス兵が競馬場に散水した時に使用したものだった。

マンダレーで昭和十九年の新年を迎え、森四六三二部隊佐々木隊第五六師団病馬廠に編入された。病馬廠は、戦地で負傷または病気になった馬を看病手当する役目。獣医の手伝いの毎日であった。朝は七時起床、朝食後各自受け持ちの馬の手入れ、昼食後は二時間の休み。夕方五時点呼、明日の勤務割当等命令される。

ビルマの午後五時頃は日も高く、夕食後は自由に兵舎外に出ることもでき、現地人の集落へも遊びに行き、ビルマ語など教

えてもらったりして楽しい日々でもあった。戦争に来てこんな楽な毎日で、日本にいるより衣食住の心配はなく、気軽な勤務前線で苦労している兵隊に対し申し訳なく思った。現地人も大変日本兵に対して好意的で、日曜日ごとの外出もでき、集落へ行くと皆集まって来て、菓子や果物等で接待してくれた。子供に軍歌など教えると、すぐ覚えて歌ってくれた。また、日本語の覚えも早く感心した。

戦況は、南方からのニュースでは日々悪い方に向かうことばかり。当部隊からもアラカン戦争に行く何人かが出陣して行き、その状況の悪いことが入電日増しに多くなり、私も昭和十九年一月二五日頃、マンガレー東部ラシオ北ミートキーナ等伝令として出発。この間英軍飛行機は、毎日午後三時には必ず飛来、マンガレー上空三〇機位の爆撃で市街は廃墟となる。四月頃からは雨の季節に入り、毎日の雨。昭和十九年五月二六日、マンガレー西北マウライク目指して病馬受領に出発。雨季のため思うように前進出来ず、空爆を避けながら、食糧は少なく、戦友の中にマラリア、アメーバ赤痢患者も出て悪戦苦闘。勿論弾薬などなく、銃も五人に一丁という有り様。情けなき思いだった。底無しの沼のような泥濘の中を馬五頭を引き連れ帰隊。また五日後出発の予定になっていた。

ビルマの雨季は日本ではとても想像できない。雨は滝のように降り、三月頃は河原であったところが今は大きな川となり、

川幅も三〇から五〇メートル位になり、谷川など濁流でとても渡河などできない。ともに体を綱で結び合い、命がけで向こう岸へ流れに沿って斜めに泳いで、ようやく岸へはい上がったことが何度あったことか。上がってみれば手足に大きな「ヒル」が吸い付いていたのは身の毛がよだった。お陰で足のカイセ（おでき）が治った。

昭和十九年十二月二〇日頃より英軍の爆撃が激しくなり、マンガレーをあとに転進作戦に入る。タイ国に入る途中、ミイクテイラーの集落に湖もあり、大変景色のよいところ。湖畔にて戦友と故郷のことを語り合い、また、軍歌で士気を鼓舞し、思ひ出多い地であった。

これからが忘れることのできない苦闘の始まりだった。二〇年三月三日、日本では雛祭りの日、敵の反撃にあい戦友一人死亡し、ミイクテイラー集落をあとにタイ国へ。カロー街道を東に二〇キロ進んだところで反乱軍に会い、戦友とも別れることになり、四、五人のグループで泰緬国境山岳道路を進んだ。時々英軍機が飛来。爆撃され抵抗することもできず、駆け足でジャングルの中に逃げ込み、夜になるのを待ち夜間行軍である。衣類・靴もやぶれはて、飯盒、水筒だけは持ち、裸足湿疹、乞食部隊同様。避難しつつ苦闘を続け、食糧なく、現地人より食べられる草を聞き、岩塩で味付け、米飯など夢で見るだけ。肉体的、精神的苦役であった。これが本当の生き地獄と思ひタイ国

へ入った。マラリアのため野戦病院に入院。病院と申しても、ただジャングルの中に、バナナの葉で囲った小屋。竹の床にアンペラを敷き、そこに寝かされ、マラリア熱に悩まされ、一時は死線をさまよう重体のときもあった。

二〇年八月十五日の終戦を十八日に初めて知る。惨敗の労苦言いがたし。幸いすっかり健康体となり、翌年二一年五月までタイ国のナコンサイン病院におり、復員を待つのみ。同六月一日、バンコック港から米軍輸送船V型船にて日本へ。浦賀港に上陸。検疫もすみ、長野県小海の里へ。一日も忘れることのできない母も健在で、七七歳でも若く元気な姿で、暖かく喜びの涙で迎えてくださった。私の一生忘れる事のできない記念日六月十五日であった。

わが隊は敵との陸上戦闘はなかった。しかし、大虐殺、反乱、逃れる婦女子、老人、子供等、泣き叫びつつ親子離別、最悪の運命を現実を目の前に見る。食糧糧秣の略奪、陰惨な風景は記憶から去らず、想像以上であった。戦場となった地方は廃墟となり、軍規も乱れ、戦跡は飢餓と猛威を振うマラリア、アミールバ赤痢が流行、恐ろしいことばかり。地獄同様、草陰には日本兵の屍の悪臭、恨と怒の目を見開き野戦の露と消えて行くのか、冥福を祈る。野戦病院内では、過労も加わり語ることもできず、憧れの故郷、親兄弟を思い出しつつ草陰に屍となり、日に三〇人位姿を消して行くあわれなり。

国内を初め国際的にも、また地球全体、世界全体が平和であるように。戦争は特に子供が可哀想である。何十年何百年と平和であるよう祈る。

